

1945（昭和20）年7月1日夜から2日未明にかけて、米軍B29による空爆で熊本市の中心街は火の海となり一面焼け野原となった。12歳の私は熊本市世安の自宅で目撃した。母校の日吉小学校も一部焼失した。終戦時は尋常高等小学校の1年生だったが、近くの大い建物が臨時の校舎だった。母校の焼失はショックだった。

私は1939（昭和14）年小学校入学、敗戦までの6年間ほとんど戦時中で勉強どころの騒ぎではなかったように思う。食べるものや着るもの娯楽など6人兄弟満足のいくものは何一つなかった。米軍機による度重なる熊本市内の空爆も激しさを増してきたが、終戦の年が、ちょうど旧制中学の受験の年だった。受験の前に、係りの先生から空襲警報や敵機襲来、空爆に備えて、校舎の床下など避難場所の確認など諸注意があった。戦時中の各家庭は、夜間は灯火管制だ。電球の笠に黒い布で覆いかぶせ部屋を暗くしていた。「欲しがりません。勝つまでは…」戦時中、国民への辛抱を強いる国のスローガンだ。「いわしの配給です。」隣保組からお知らせの声がかかっていたのを思い出す。敵機襲来時は防空ずきんをかぶり家族全員、地下の防空壕へ非難した。真っ昼間、本当はやってはいけないことだが、こっそりと壕を抜け出して自宅2階の窓から超低空飛行中の敵機の様子を見た。一人は操縦かんを握り、一人は標的目掛けて機銃掃射の構えを見せていた。本当に手に取るように見えた。

人が人を殺す。国どうしでこんな戦争をして何になるのだろうと、その異様な光景が忘れられない。私は小中学校時代に戦中戦後を経験した。1945（昭和20）年8月15日に家族揃って拝聴した天皇陛下の「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び…」のラジオから流れる玉音放送を当時12歳の私は鮮明に覚えている。

恥ずかしい話だが運動会の弁当の時間に、同級生がポイと捨てた、ゆで卵の殻に付いた白身を、こっそり拾って口にした苦い経験もある。